

ふるさとファイル

展示コーナーだより
第52号
平成24年10月
生涯学習課文化財係



長岡天満宮

近くの遺跡

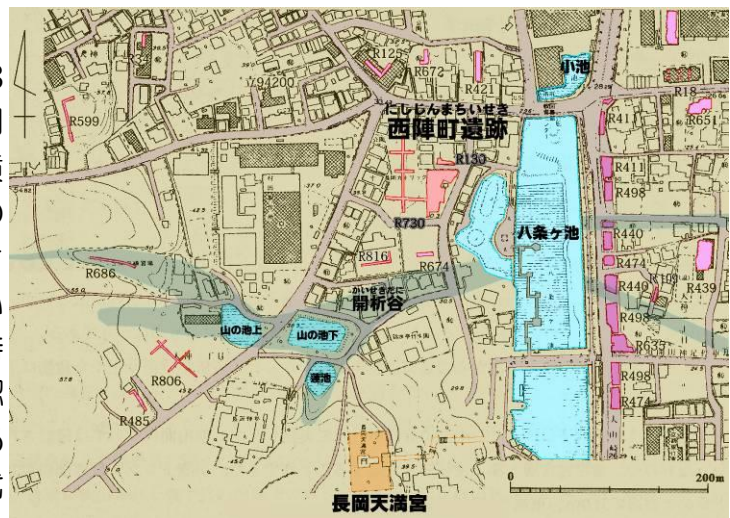
長岡天満宮の北方には西陣町遺跡があります。西陣町遺跡と長岡天満宮の間には、長岡天満宮の北西にある『山の池』付近から「八条ヶ池」に向かう谷がありました。

西陣町遺跡の発掘調査では、平安時代の墳墓や鎌倉時代の火葬遺構と堀などが見つかっています。その堀からは多くの瓦が出土しました。このような調査成果から、平安時代には貴族の墓が築かれ、鎌倉時代には火葬が行われた葬所となり、また堀で囲まれた貴族の邸宅か寺院があった時期もあると考えられています。

展示期間：平成24年10月3日（水）～平成25年1月6日（日）＊図書館休館日は除く。

長岡天満宮付近の調査成果

長岡天満宮の周辺では、今から2～3万年前から人の活動が見られます。長岡天満宮の南西にある長岡公園では、古墳時代の勾玉や鏡が出土しています。右の図のR730地点では、古墳時代の鏡片のほか、弥生時代の石の鏃も出土しています。八条ヶ池より東側では、旧石器時代の石器や弥生時代後期の集落も確認されています。古い時代の調査成果がある中で、今回は、平安時代から鎌倉時代の成果を取り上げてみました。



長岡天満宮付近の発掘調査地

平安時代の墳墓

墳墓は、約3m四方で、周囲に幅約50cm、深さ約20cmの溝を四角く巡らせたものです。一辺の方向は、ほぼ東西南北に合わせています。南辺の溝からは、平安時代の素焼の皿48枚が、まとめて出土しました。西辺の溝からは凝灰岩製の相輪（塔の先端部分）が出土しました。この遺構は、溝で囲まれた内側に土を高く盛り上げて、頂部に宝塔が建てられていたと考えられています。このような構造は、平安時代の貴族の墳墓と推定されていて、墳墓の外側を、柵で囲んでいたようです。



平安時代の墳墓
復元模型

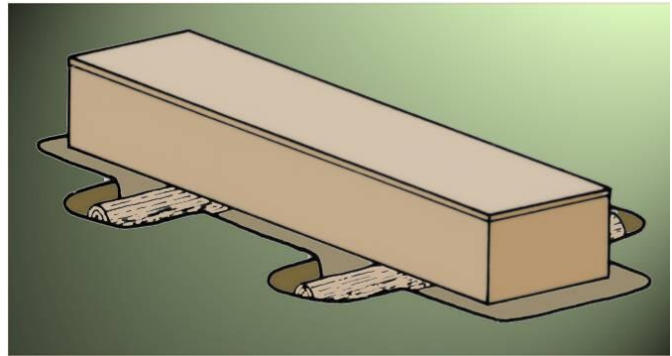
平安時代の墳墓跡

（復元模型や出土品は、長岡京市埋蔵文化財調査センターで常設展示しています）



鎌倉時代の火葬遺構

長方形に掘り込まれた鎌倉時代の火葬遺構が、3か所で見つかっています。そのうち2つは、ほぼ南北方向に長辺をもち、ひとつは北で西に少し振れています。南北方向のひとつは、幅約55cm、長さ約190cmあり、長辺の両側に2か所の対称の位置に張り出した掘り込みがありました。これは、棺を支える木材を置くための施設と考えられます。もうひとつの南北方向のものは、幅80cm、長さ約120cmと少し小さいものです。両者とも、掘り込みの壁面は火を受けて朱色に変色し、炭や灰が多く混じった土で埋まり、鉄釘も出土しました。このような規模と構造は、「吉事略儀」(『新校群書類従』雑部)の火葬風習の記述によく合っているようです。



火葬棺の設置状況復元図



鎌倉時代の火葬遺構

(左はR130地点、右はR730地点検出)

鎌倉時代の堀と軒瓦

幅約4m、深さ1~1.2mの堀が、南北方向に43m以上にわたって掘られていました。堀底は、北から南に緩やかに傾斜して低くなっていました。堀からは、軒瓦を含む小型の瓦類が多く出土しました。堀の西側に沿って、瓦葺きの塀が築かれていたのでしょうか。立派な堀で囲まれたこの施設の規模や内部構造はわかりませんが、貴族の邸宅か寺院ではないかと考えられます。



堀から出土した軒瓦と土器類



鎌倉時代の瓦がたくさん出土した堀跡
(R730地点の調査 南から)

(イラストや写真・図・成果内容は、下記文献から引用しました。)

木村康彦・北村大輔他「長岡京跡右京第130次調査概要」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集1985年
原 秀樹「右京第730次調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成13年度2003年